

### 13. $^{89}\text{Sr}$ による有痛性の転移性骨腫瘍の除痛療法の臨床経験

小西 章太 絹谷 清剛 横山 邦彦  
 利波 紀久 (金沢大・核)  
 秀毛 範至 油野 民雄 (旭川医大・放)  
 久田 欣一 (北陸中央病院)

$^{89}\text{Sr}$  の国内第 II, III 相臨床試験で, がんの骨転移患者に対する除痛療法を経験した. 対象は疼痛を伴う骨転移患者 14 例で, 男性 11 例, 女性 3 例, 原発は前立腺癌 6 例, 大腸癌 3 例, 乳癌 3 例, 胃癌 1 例, 原発巣不明が 1 例であった. 各患者に  $^{89}\text{Sr}$  1.5 または 2.2 MBq/kg を静注後 12 週間, 疼痛の自覚的改善と鎮痛剤の増減を観察した. 明らかな疼痛の改善は 9 例で認められ, うち 2 例では完全除痛が得られた. 原発巣や骨転移の性状, 投与量は除痛の程度に関連しなかった. 鎮痛効果は平均 6.8 週間持続した. また重篤な副作用は認められず,  $^{89}\text{Sr}$  による転移性骨腫瘍の除痛療法は有用であると考えられた.

### 14. 肺良性病変の FDG-PET : 肺結節性病変の FDG-PET と TI-SPECT

西川 高広 東 光太郎 大口 学  
 玉村 裕保 谷口 充 興村 哲郎  
 山本 達 (金沢医大・放)  
 関 宏恭 (金沢循環器病院)

目的; FDG-PET および TI-SPECT による肺結節性病変の良悪性鑑別の可能性について比較検討した. 対象; FDG-PET と TI-SPECT を施行した肺結節性病変 30 例. 全例, 手術にて組織学的検討がなされている. 方法; TI は ER, DR, RI, FDG は SUV, T/N を算出した. 結果; 肺癌は 23 例, 良性病変は 7 例であった. FDG, TI の肺良性病変の陽性率は, いずれも 57.1% と高値であった. FDG (91.3%) の方が TI (78.3%) よりも肺癌の陽性率が高値であった. FDG, TI 陽性例において, 集積程度は, とともに肺癌と肺良性病変の間で有意差はなかった. RI は, 肺癌の方が肺良性病変よりも高い傾向にあったが, 有意差はなかった.

### 15. 肺癌放射線治療における $^{201}\text{Tl}$ -SPECT の評価

大口 学 東 光太郎 西川 高広  
 玉村 裕保 谷口 充 興村 哲郎  
 山本 達 (金沢医大・放)

放射線治療を施行した肺癌患者 28 人に  $^{201}\text{Tl}$ -SPECT を施行した. 治療中 (40~50 Gy) および治療後で治療前と比較したのは各々 20 名であった. 治療中では, ER, DR, D/E, RI は治療前と比較して有意差はみられなかった. 治療後は ER, DR が治療前と比べて有意な低下を示したが, D/E および RI は有意差がなかった. 治療後 RI が 20% 未満の群 11 例では, 前に比べ有意な低下を示したが, 20% 以上 9 例では逆に有意な上昇を認めた. このことは放射線治療における局所治療効果の判定に RI が有用であることを示唆している. しかし, RI 20% 未満の群と 20% 以上の群とでは生存率に有意差は全くみられず, 予後判定因子とはなりえないことも示された.